

## すずばらのバラクキハバチ（新寄主）

令和2年6月上旬に、空知地方のすずばら（ロサ グラウカ：*Rosa glauca*）栽培園で、花芽新梢のしおれ症状が発生した。新梢の5～7位葉の先がしおれる症状を示し、このような被害新梢が1枝あたり5～6本以上ある状態となり、出荷不能な花枝が多発した。調査した1ほ場では、被害株率はほぼ100%、株内の被害枝率も7～8割となっていた。

被害新梢のしおれた部分の茎内には、体長約7・8mmの幼虫が内部を食害しているのが確認された。6月上から中旬には、幼虫は茎内から脱出し、土中に潜り、前蛹で越冬した。翌年4月中旬に体長5・7mmの成虫が羽化し、新梢の鱗片葉の内側への産卵が確認された。5月上から中旬に幼虫が孵化し、花芽新梢の芽（先端側）から茎内に食入し、基部に向かって食害することで、上記のしおれ症状を発生させていることが明らかになった。

道総研フェロー原秀穂博士により、羽化した成虫の形態的特徴から、ハバチ科マルハバチ亜科バラクキハバチ属のバラクキハバチ(*Ardis pallipes* (Serville))と同定された。北海道内の栽培植物での発生確認は初めてである。

（花野菜セ・空知農業改良普及センター北空知支所）



すずばらのバラクキハバチ（上：被害、左下：幼虫、右下：成虫）（花野菜セ 柿崎 原図）